

たった一つの命をかけ、そして、散っていった同年兵や、この戦争で散華された多くの英霊の御冥福をお祈りしています。

それとともに、不思議に命永らえた私達は、地獄さながらな戦争の悲惨さを子孫に伝え、後世に二度と繰り返させてはならないと思います。私は平和の有難さをしみじみと感じ、これから残された人生で、何か少しでも世に奉仕する事を考えつつ、生きて行きたいと思えます。

最後になりましたが、私が十五歳で海軍へ入った時の私の家の家族は、父母を頭に長男が私、弟三人、妹三人の九人家族でした。

昭和二十一年一月二日 復員

昭和二十三年九月 結婚

子 二人、内孫 三人、外孫 二人

私 町役場に二年間勤務。いろいろ転職。

中華料理店経営、今は息子夫婦に譲る。

夢で「初霜」で最後まで共にした乗組員のこと

をしばしば夢見ます。

嗚呼 海軍少年電信兵

香川県 中尾 茂 樹

私は、昭和四（一九二九）年三月二十七日、四国の香川県で生まれました。

昭和十八年八月九日、十四歳で佐世保の海兵団へ入隊しました。昭和十八年と言えば、太平洋戦争も戦勢利あらず、次第に国民生活も不自由となりました。男のみならず女までも総動員されて戦力の増強、補給の拡大に、銃後の底力を結集して、祖国の安泰に貢献せんと奮励したことが、子供心にも強く心に残っています。

海軍へゆけば家庭の中で、人べらしになる、または満州の義勇軍へ行くか？ とにかく男の子として早く国難に赴くべきとの気運濃厚の折で、たまたま海軍入りの話が小学校の先生よりありまし

た。

その当時の我が家の家族について述べる

父 健在 農業 田七反、畑五反

(葡萄、養蚕・年三回)

母 健在 農業

長兄 健在 陸軍(近衛兵)

姉 若死

次兄 健在 三菱神戸造船所勤務

本人 健在 青年学校

弟 健在 小学生

妹二人 未就学の児童

と八人家族でした。

その時の私の本籍の鴨部村では、その年の小学校二人、青年学校五人計七人の受験者が津田の公会堂で試験を受けました。全員合格でした。

合格基準 私の数値

身長(センチ) 一四七以上 一四八

胸囲(センチ) 七一以上 七一

体重(キロ) 三八以上 三八

私は毎晩深呼吸をして胸をふくらむように努力しました。

昭和十八年八月九日、一人きりで佐世保へ入りました。家を出る時は派手な見送りはなくて、部落の人のみの心の籠った見送りでした。バスで志度の駅へ、志度より列車、岡山より特別列車、一日で佐世保へ。旅館へ一泊。翌日第二海兵团へ。遠い所を歩いて大人数で入団しました。兵舎へ入り、支給された海軍の被服に着替えました。「今からは皆帝国海軍軍人だトロトロするな。頑張って早く一人前になれ」とのお達しであった。

私の事に関して回想してみましよう。

私が生まれて数年で満州事変、そして昭和二十二年七月には支那事変が勃発しました。小学校の三年の時でした。在郷軍人に召集令状がきて、勇ましい軍歌で送られて行きました。そのかげに今後不安をかくせない家族がありました。当時は戦死者、負傷者が新聞で報道されました。戦死者の遺骨が涙を必死にこらえる遺族に抱かれて帰還す

るのを、村境まで迎えに行つて、小学生ながらお
気の毒な気持ちになつて胸いっぱいであつたこと
を覚えております。

八月になり父に召集令状が来て出征しました。

七月初旬に初めて女の児が生まれたばかり（私の
初の妹）。本宅の藁屋根の藁が古くなり雨漏りが
するので、出征間際まで葺き替えをして、生まれ
たばかりの妹（赤子）をあやして、笑つたと言つ
て満足して出征して行つた状況が、子供ながら頭
にこびりついています。

父は直ぐ多度津港から支那方面に出て行き転戦
して奇跡的に元気に帰つてくると、今度は入れ替
えに昭和十六年一月、長男の兄が徴兵で出征しま
した。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争勃発です。

日本国民は敗戦の不幸を体験する運命となりました。
早く戦争を終わらせたいとの気持ちで、私は
昭和十八年三月に高等小学校を卒業、同年八月九

日、海軍少年電信兵として佐世保第二海兵団に入
団し、直ちに山口県防府市にある防府海軍通信学
校に入校し、新兵教育を受けました。

十四歳の少年の私が未成熟の体で受ける教育は
普通の成人と同じ訓練です。小銃を担いで駆け足
をする時は、今にも息が止まりそうに苦しく意識
ももうろうとなりました。

一、護国の神兵の養生

二、三步以上は駆足

三、迅速、確実、且つ静粛

四、強固な精神と身体の錬磨

等の教育目標に基づき、朝昼晩の別科各一時間は
全裸、パンツ一枚で、練兵場を酷寒、酷暑を通じ
て隊列を組んで駆足をした後体操をする。大寒の
朝六時、冷え切つた体に鞭打つて走る自分は言語
を絶するものがありました。もう一つ苦しいこと
は、玄米の試食分隊となり、食事時間が特別に長
くなく、咀嚼そしゃく不足のため消化不良で下痢がよく
続きました。

また、暑さのため皮膚病になり、今まで経験のないことがありました（アセモ、タムシ、香水の不良？ 湿疹、下痢）。護国の神兵になるためには、これ位は何かと頑張りました。

通信学校での教育内容は、——無線、モールス信号、音の信号を聞く、文字に直す、です。入校後しばらくして気がついたことは、都会と田舎の学校の学力差は最初よりあったと思います。同期生は何しろ数百人もいて、競争は激しい。体力の不足は根性で補う。私は普通の成績であつたらしい。

学校の編成は

教班長——二五〇—三〇人

分隊長——一〇〇—一三〇人

分隊長——三〇〇人

受け持つ見当であつた。

学校卒業は昭和十九年五月、九カ月の在校でした。第六十八期電信術練習生と呼ばれました。

昭和十九年五月、防府の海軍通信学校卒業。スラバヤ第二十一通信隊付きを命ぜられました（スラバヤはジャワ島にある）。そして艦船に、南方に、大陸に、あるいは内地の実施部隊に配属されました。私は佐世保第一海兵団に仮入団し、スラバヤへの船便を待つことになりました。

いよいよ日本を出て行く日がやってきました。船は「東亜丸」というタンカー船で、門司港を出港し即戦闘態勢に入り、空と潜水艦よりの魚雷攻撃に備えての見張りなど監視訓練の連続です。揚子江河口の東シナ海を通り、台湾の基隆に入港。内地では不足しているおいしい菓子等が、酒保品として支給されました。

基隆を出港して高雄港へ向かう途中、夜間どこから飛来したのか、敵の爆撃機よりの投弾によって、何隻かの船が船団（約三十隻位の見当）より消えて行きました。高雄港は入口は狭いが、中は広く立派な天然の良港でした。

次はフィリピン、ルソン島マニラ港へ入港し何

日かここで停泊しました。マニラを出港してフィリピンの島々の西側(南シナ海)を通りました。景色のよい静かな油の中を走るような日が続き、海岸まで生い茂る青い樹林が肉眼で見える美しい所ですが、ここが何カ月後には激戦の海になるとは当時は全く想像もしていませんでした。

次はボルネオのミリに入港し油など補給を受け、次のシンガポールに向かう途中、潜水艦の攻撃を受け何隻かが沈没しました。私達は見張りを厳しくして警戒を続けました。

翌日、船団はジョホール水道に入り、兩岸の美しい造成された景色に見入りながら、さすがに東洋のシンガポールだと感心しました。シンガポール島のセクタ軍港に入港すると、昨夜潜水艦の攻撃を受け大破した艦船も入港しており、船尾が一メートルから二メートルで浸水するような状態に入港した船もいました。「危なかつたなー。ここでも生き残れたなあー」と話し合いました。

セクタ軍港では四日仮入隊した間、作業員として船に乗って飛行場の新設作業に行きました。ここには内地から先に来ていた同年兵や先輩の方々と会い、ようやく遠い所まで来たものよと肩を叩き合いました。

やがてセクタ軍港を出発し、ジャワ島スラバヤに向かつて小さな運搬船にて出港。やがてスマトラのパレンバン沖でエンジン故障で急遽バタビア港に入港することになり、ここで下船してまた仮入隊することになりました。ここから汽車でスラバヤに向かいました。

七月三日頃、ようやくスラバヤ海軍第二十一通信隊に入隊しました。内地を出てから四十日かかりました。いよいよ海軍軍人としての勤務が始まりましたが、我々が想像していたものとは大違い、配置教育、食卓番、掃除、洗濯、寝具の準備、待望の電信室勤務ですが、即実戦です。銃をとって敵と向かい合っている戦いとは違ったむずかしさと責任がずっしりとのしかかってきまし

た。

戦局は我が方に不利になり、フィリピン・レイテ沖海戦、台湾沖海戦、フィリピンに米軍上陸、沖繩本島上陸、戦艦「大和」沈没、玉砕、玉砕が続き、ジャワ島の付近ではボルネオのバリックパン、サマリンダ街道の激戦、アンボン、ラポールにも毎日何回となく爆撃を受けましたが、最後まで頑張り通していました。

私は終戦の一週間前にジャワ島中部の標高五五〇メートル位にあるバンドン第二十一通信隊第三分遣隊に派遣されました。ここは敵が上陸して来た時の最後の決戦地になるように聞いていました。

いよいよ八月十五日終戦の日を迎えました。東京より発せられる新聞電報を私が受信しましたが、受信し終わると先任下士官が来て電報を持ち去ってしまいました。日本が無条件降伏したとの内容です。しばらくして全員が一室に集められ、

分遣隊長は「日本の無条件降伏」を涙ながらに報告され、全員悲痛の涙にくれました。以後次から次へと終戦処理の命令があり実施に移されました。

一カ月程して三〇キロ位離れたチコレという所の山に、トタン屋根、竹の柱、椰子の葉で作ったアンペラや竹を押しつぶした網代で囲った速成の仮兵舎が沢山建てられました。そこには海軍の艦船の乗組員、陸上部隊の隊員、航空隊員が集結して、畑仕事をしたりして約六カ月生活し、その次はバタビアの作業隊へ移動することになったのですが、インドネシアに独立運動がおこりました。

この大部分は独立運動軍に占領されているため、我々は一旦バンドンに出て、飛行場から飛行機でバタビア空港に着き、そこからジャガタラ作業隊に送られ、連合軍の作業に従事することになりました。昭和二十一年三月です。

ジャガタラ作業隊で二十日ぐらい作業をしていると、中部ジャワのソロ、スロワカルタ、ジョク

ジャカルタに集結している陸軍部隊と、中部ジャワの海軍艦船乗組員がテガルという漁港より南方の陸海軍兵士が集結しているレンバン島（シンガポールとバタビアの中間の島）に移動することになりました。そのため、テガルに輸送支部が新設され、通信連絡担当として私たちの隊員六人が選ばれ、バタビア海上輸送部より無線器一式をもつて、テガル支部へゆき通信連絡を担当することになりました。

テガル支部の電信室は、港より五〇〇メートル離れたインドネシア陸軍の兵営内につくられ、陸軍より派遣された通信兵六人（主として陸軍側と連絡）と海軍側六人（主として海軍側と連絡）が通信業務に当たりました。

約一カ月の輸送連絡業務を終え、再びバタビア海上輸送部へ帰り輸送部付となりました。約五カ月通信業務に携わっていましたが、輸送部にも連合軍作業班が新設され、十月頃より再びこの連合

軍作業に出ることになりました。作業所はオランダ軍兵舎でそこでの作業と、もう一カ所はストアルームとか言って物資を各隊へ送付補充する業務でした。他より送ってきた物資を整理する業務でした。

年が代わり昭和二十二年となり、我々もいよいよ三月末に内地へ帰るとの情報が聞かれるようになりました。私にはどんな理由か昭和十九年四月より約三年間自宅よりの連絡が全く無かったので家の事も心配でした。

昭和二十二年三月二十三日、いよいよ内地へ帰る命令が出ました。上官、同僚に見送られトラックに乗り込み検問所に入り、ここで荷物等の検査がありました。自分にとってはいかに大切なものでも、持ち帰りに不適合品は否応なく没収されました。内地の食糧不足、物資不足は新聞等で見ていたので、生活の苦しいことは覚悟で帰国する事になりました。

日本より来た「摂津丸」という輸送船が、バタ

ピア港に接岸していました。人員、本人の確認をされた後、一人、一人舷梯を登って行くのです。満二十年十月、いろいろあったジャワとお別れることになる、何とも言えないつかしさを覚えるのでした。

バタビア海上輸送部長・木下中佐や担当の将校も内火艇に乗って構内の海上より見送りに来てくれ、しっかり最後の手を振ってくれました。この方たちとは生涯最後の別れで、その後一度の文通もありません。しかし受けた御恩は頭の中から一生離れません。皆喜んで有頂天になり帰国して行くのに最後まで、責任を果す上官はさすが立派だなど思っています。

戦時中四十日かかって現地へ着いたのに、帰りは約八日間で広島島の宇品の港へ着きました。「御苦労さま。お帰りなさい」という職員の方々にかえられて上陸し、宿泊所に着き、検査、検疫をすませて最初に停車するのが広島駅でした。

ニュース、新聞等で知っている広島が今眼前に現われたとき、アッと驚きました。あらゆる建物すべてが、すべて壊滅し焼野原となった状態は何とも言語を絶するものがあり、同乗の戦友も黙して語らず目に涙、これが内地地上陸しての第一歩でありました。

続いて岡山駅で下車、宇野線に乗換えました。岡山も空襲でほとんど焼けていました。宇高連絡船で高松へ着くと、県庁をはじめすべてが空襲で焼けていましたが、乗客、市民の行動、言葉使用などが、意気消沈ではなく復興気分が湧いているような気が感じられたのが何よりの慰めでした。さて、昭和二十二年四月七日午後三時、いよいよ生まれ故郷へ帰ってこることができました。南方の戦地にいる時、数年間にわたり内地の実家からの音信不通には痛く心配させられましたが、いざ実家へ帰って見ると、親も兄弟も皆元気で、私が帰るのを首を長くして待っていてくれたのでした。父母の喜びはどのようにとえたらよいので

しょうか。まずは取り敢えず神様、仏様へ無事帰国の報告とお礼を申し上げました。ここから家族の一員に復帰したのです。

私たち海軍電信第六十八期生は約三分の一の者が戦死です。練習生時代は十四〜十五歳の少年で、当時訓練に整列している私達の前に教官が来ると大きな声で敬礼と共に官等級氏名を申告する訓練があり、聞こえる声はまだ可愛い子供の声で、顔、容姿もまるで子供でありました。そして卒業して任地へ赴く途中、艦船の沈没、空襲、魚雷攻撃等により若い尊い生命を落としたこれらの戦友のために、忠魂碑を建立しようとの声が上がります、山口県の防府天満宮の境内に碑文を入れた立派な碑が建立され、既に二十一年の年月を経ました。毎年九月二十三日の秋分の日に大勢の御遺族及び元同期生が集まり、厳かに慰霊祭を行っております。私もお陰をもちまして一回の欠席もなく参列させて頂いております。

ここに「海軍電信第六十八期会 会員名簿」の巻頭に掲載され「嗚呼 海軍少年電信兵之碑」の字句と碑文を収録し、御冥福をお祈りします。

「嗚呼 海軍少年電信兵之碑」

昭和十八年八月、太平洋戦争ノ戦局、極メテ不利ト伝エラレ、国難、真ニ急ヲ告グル時、齡、僅十四、五歳ヲ中心トスル少年達ノ多クガ、意ヲ決シテ海軍ニ其ノ身ヲ投ジ、防府海軍通信学校一部横通校ニ入校ス。

翌十九年春、日夜ノ激シキ訓練ニ耐エ、ソレゾレ艦船ニ南方ニ、或イハ大陸ヤ内地ノ実施部隊ニ勇躍配属サル。

各戦線トモ想像ヲ絶スル大激戦場、特ニ、ガダルカナル撤退以降、南方洋上ハモトヨリ、内外ヲ問ワズ、戦火ハ熾烈ヲ極メルナカ、史上最年少ノ電信兵トシテ、勇敢ニ、其ノ任務ヲ遂行セリ。

唯々、残念ナルハ、祖国ノ安泰ヲ信ジ、護国ノ華ト散リシ六百余命ノ同期ノ桜、或イハ、愛スル

艦船ト共ニ、水漬ク屍、ハタマタ焦土ノ祖国ノ丘ニ草生ス屍ト化シ、再ビ、相目見エルヲ得ザルハ、痛恨ノ極ミナリ。

相別レテ四十年、此所、想イ出多キ縁ノ聖地、防府天満宮ノ一隅ニ、戦争ノ惨禍ト、残サレシ者ノ摺ミシ平和ノ尊サヲ、未来永劫、忘却セザルコトヲ誓イ、諸兄等ノ御魂、安カレトノ願イヲ籠メ、茲ニ、鎮魂ノ碑ヲ建立ス。

昭和五十八年十月吉日

防府海軍通信学校

第六十八期普通科電信術練習生

特六十八期普通科電信術練習生 有志一同

復員して家庭へ戻り家族の一員となりました。昭和十八年九月入隊が十四歳ですから、昭和二十二年の復員時にはまだ十八歳です。現在から言えば二十歳未満の未成年です。家へ帰るとまたすぐ、元の子供に返り両親の厄介者になりました。

一カ年が過ぎ、自分の将来の生活を考える必要

があり、四国配電㈱の入社試験を受け、昭和二十三年六月一日入社しました。昭和六十三年三月三十一日退職、その間、会社のため、お客様のためを第一に三十九年十カ月勤続しました。この間変電所、営業所の配電関係、あるいは保安協会や電気協会は引き続き勤務をしました。現在はシルバー人材センターの紹介で地元の三ツ星ベルトへ勤めています。

四国配電在社中に電気技術者のための電検三種の国家試験には昭和二十五年に合格し、定時制高校は二十六年度に卒業しました。いずれも独学で挑戦でしたが、職場にも学校にも親切な上司や先生に恵まれてハッピーでした。

最後に、結婚は昭和二十九年四月二十日です。夫婦揃って元気です。子供は娘二人で孫は四人（男三人、女一人）で元気です。